



東京八王子プロバスクラブ

創立 1995 年 10 月 18 日

2023～2024 年度 テーマ

プロバスだより

第334号

2023 年 9 月 14 日発行

編集・発行 情報委員会

楽しみながら学び合い、支え合おう

第 334 回例会

日 時 令和 5 年 8 月 17 日 (木) 12:00～14:00

場 所 八王子エルシィ

出席者 32 名 出席率 73%

(会員総数 48 名、欠席 12 名、休会 4 名)

1. 開 会

土屋例会委員長

第 334 回例会を開催します。本日の出席者数は 32 名、出席率は 73% です。

2. 会長挨拶

持田会長

本日は本来の第 2 週の開催日が会場の都合で第 3 週の今日になりました。変更にも関わらず、連絡も徹底されて、皆さんご出席頂きました。ありがとうございます。



さて、いつもより本日は少し賑やかな例会になりそうです。と言いますのは、遠方よりご多忙の中、わが八王子プロバスと友好クラブであります埼玉浮き城の皆さんが参加されております。会長の岩崎安裕様、幹事の森田義弘様。交流担当の加藤力也様の 3 名の皆さんです。普段の私たちの例会を最後まで見て頂けるようです。そして、こうして親睦を深める機会ができることを喜びたいと思います。後ほど、会長岩崎様にはご挨拶を頂きたいと思います。

もう一つは嬉しいことがあります。それは本日新入会員を紹介できることです。橋本治義様です。後ほど杉山会員から紹介を頂きます。よろしくお願いします。

そして、今日の卓話は歴史を学ぶ企画になっております。

「戦中、戦後あの日あなたは何をしていましたか？」と言うノンフィクションのお話をたっぷり聞

けることとなります。昭和 10 年生れの 7 名の方に話して頂きます。是非、ご期待下さい。今年度は、例会をとにかく楽しいものにしようという考えで進めてみたいと思っております。その第一回です。よろしくお祈りします。

3. 来賓ご紹介とご挨拶

友好クラブであります埼玉浮き城プロバスクラブより、岩崎安裕会長、森田義弘幹事、加藤力也交流担当の 3 名の方をお迎えしました。

岩崎安裕会長挨拶

埼玉浮き城プロバスクラブの会長を務めております岩崎です。



2010 年に八王子プロバスクラブにお邪魔し、クラブ発足に関して、いろいろご指導頂き有り難うございました。翌年の 2011 年 6 月 11 日に埼玉浮き城プロバスクラブとして発足し、今年で 13 年目を迎えることになりました。

今後、皆様方と勉強をさせていただきながら、更に交流を深めて行きたいと考えております。

4. ハッピーコイン披露

塚本副会長からハッピーコイン 15 件の披露がありました。(7～8 ページに掲載)

5. 新会員の紹介

杉山 友一

本日の例会からお仲間に加わって頂く橋本治義様はかつてのプロバス学習サロ



ンの会員でプロバスクラブをよくご存じです。ご事

業は織物会社の経営で、現在は不動産賃貸業、悠々自適な方です。社会活動として東京都の家庭裁判所調停委員を20年間務められまして藍綬褒章を受章されております。年齢は私と同年で昭和10年生まれですが皆さま方末永くどうぞよろしくお願い致します。

橋本治義会員の挨拶

このたび杉山友一会員に大変お世話になりました。当クラブに入会することになりました橋本治義です。どうぞよろしくお願い致します。



6. バースデーカードの贈呈

8月生れの会員に池田会員手作りのバースデーカードが贈られます。宮崎浩平会員及び久野久夫会員は本日欠席なので郵送とします。

7. 卓話

78年前の8月2日は八王子大空襲、15日は日本敗戦。「あの日あなたは、どこで何をしていましたか」というテーマで昭和10年生れの会員に卓話をお願いしました。

私の8月15日

八王子市生まれの人達には八王子大空襲は8月2日ですが、私は当時岐阜県関町（現在関市）に住んでおり、すぐ近くの岐阜市の大空襲を裏山から遠望した日は、7月9日夜11時から翌12日0時20分の間のことでありました。岐阜市は約130機のB29爆撃機による焼夷弾爆撃によって市街地の7割が焼け野原になりました。照明弾がぼんぼん撃ち込まれ、真昼のように明るくなる様が今も脳裏に焼き付いています。死者約900人、負傷者1,000人以上に上りました。そして8月15日、両親がラジオの前で正座をし、手を畳につけ、頭をさげて、玉音放送を敬聴していました。その厳粛なたたずまいを見て、私は大変なことが起こったんだと直感しました。

父は内村鑑三の弟子で敬虔なクリスチャンで、日本が戦争を始めたことにとっても心を痛み、良心的に深く罪の意識を持っており、教師でしたから生徒達の前で、また、教員講習会の席などでそのことを告

岩島 寛



白せざるを得なかったようであります。そのために先生仲間から非難されたり、特高警察に付け狙われたりしたものですから、居づらくなって、八王子勤労中学（現在八王子学園）から福岡の福岡女学院、九州女学院、そして岐阜県武儀高等女学校と転々と職場を変えて来たのです。

玉音放送を聞いた頃の住まいは、千手院というお寺で、本堂を間仕切りして3世帯がそこで生活していました。私たちの住まいの隣には、植木等のご両親とお姉さんが住んでおられました。植木等はのころ東京の大学に通っていました。その翌年の夏祭りで、のど自慢大会があり、たまたま植木等が東京から帰って来ており、のど自慢に出場され「ブンガワソロ」を歌い、それが抜群にうまく、鐘をたくさん鳴らしました。私も出場し「カムカム エブリボディ」を歌いました。進駐軍の影響が大きかったのでありましょう。

戦中戦後とはとにかく食糧事情が悪く、育ち盛りの私にとって、それはつらい思い出ばかりが残っています。福岡の舞鶴幼稚園の時に買ってもらった大事な「キンダーブック」を全部友達と食べ物と物々交換してしまいましたが、母は知っていても何も言いませんでした。しかし、母の留守に配給で家にあった砂糖をこっそりなめた時には、こっぴどく怒られました。その砂糖はキューバ糖という輸入品で、茶色をした未精製品で、ウジなどが湧いて不衛生でしたから、母は「死にたかったら食べなさい」と言いました。母は内職として夜遅くまで裁縫をしたり、農家に行って自分の大事な反物や着物を米や野菜と物々交換をしていました。経済的には貧しさのどん底でしたが、自然は実に豊かで、自然を友としての遊びは実に豊かでした。蛸狩り、松茸狩り、たにし拾い、イナゴ捕り、小川をせき止めて魚のかい捕り、蜂の子捕り、昆虫採集、長良川横断などなど。勉強に関することは何も思い出せません。今思うと、この戦中戦後のひもじさによって忍耐を培い、平和憲法に支えられながらアメリカの豊かさにあこがれて、黙々と勤勉に豊かさを追求してきたのが、私たちの年代であります。そして1980年代には「Japan as No.1」とまで言われるようになりました。昭和という時代を良くも悪しくも満喫したのが我々の世代であります。

私の履歴

私のおやじは終戦時の時は、太平洋戦争末期であり、昭和20年8月1日であり、已に織機は戦争に勝つために供出されており、父は同時に八王子市台町4丁目町会長で、殆んど家に居らず、母や兄は学徒動員、姉も動員でいない。私は、兄、弟、妹と居た。そこに隣の大学生が今晚八王子が空襲になるとの事でそれを信じて寝た。夜中には母親を中心に防護の体勢を備えた。三人の男友達は防空壕の上に畳三枚を重ね一時しのぎの為に作った。暫くして、三人が飛び出した後に三発の焼夷弾があった。そこで生き延びて、隣は材木屋、もうダメと覚悟し我家を後にし、母を中心に逃げた。途中で夏布団、不布（フスマ）等は無くなったが、何とか逃げた。翌朝一緒に逃げた人達とも会う事が出来た。我家は鶏三羽と金魚が二匹残ったのが眼に残った。

丁度夏休みを利用して、青梅が父母の実家であり、母の場所に移動して、毎日米の替りにコオリヤンや、たき火にヤブを加えたり、又、私達三人は足が早く運動会では沢山の賞品を貰ったのを覚えている。

家は古いが住宅が出来あがり、八王子から学校へ通った。学校は戦時用のものであり、授業の一部として使ったり、他の商業学校や、焼け残りの広い部屋を借りて、勉強をする場所を探した。

転宅後は私以外の者は他に良い状態で、夏休みを利用して小学館で勉強し、後の学校の模擬試験を目途に受けた。今迄の工業高校から普通高校へと進路変更がなされ、立川高校へと変わった。就職は私が織物業であり、その関係で紡績業を選んだ。

二年間は会社の費用で勉強し、他工場へ移動する日に自分の職場が決り、三年後に海外勤務となり、27才から中米を中心にエル・サルバドル共和国（七年半）、キューバ共和国（一年半）、入隊、除隊を含めると三分の一を越える。早い時期から良い経験をしたものだ。

私の8月15日

昭和20年8月15日には、私は国民校4年生で、檜原を通っている五日市街道（現、秋川街道）の南にある河岸段丘の一段下がった平らな場所に建てた

濱野 幸雄



掘立て小屋にいました。

昭和20年の夏休みに入ると、父は自宅に残り、私たち家族は、五日市街道にある、現在の一本松バス停留所から左に入り、段丘の一段下がった平らな場所に掘立て小屋を作り、そこに家族と私と同年の従弟がいる母の妹一家と一緒に疎開していました。其処には、3軒の掘建小屋があり、その内の1軒に、夏休みが終わるまで住んでいました。小屋へ降りる細い坂道の壁にL字型の防空壕を掘り、空襲警報が鳴ると、その防空壕に飛び込みました。

その為、8月2日、八王子の空襲時は自宅に居ませんでした。其のお陰で余り怖い思いをしなくて済みました。2日から数日後、自宅に帰ると、住まいも工場も焼け落ち、市内、全て焼け野原となっていました。住まいから東へ150m程先まで3棟程の工場が建っていましたが、その先に空地（現、平岡西公園）があり、その空地の為か、その先の隣の家から東に、浅川の土手沿いに、田町方面まで焼けずに、今でも戦前の建物が残っています。

今でも覚えています。焼け落ちた家の跡にポツンと立っていたのが、黒い金庫でした。後に金庫が冷めてから開けて見ると、ベークライト製品は変形して使い物にならず、書類は金庫の壁に接した処は焼け焦げていたのを覚えています。焼け跡からは、八王子駅方面まで見え、焼け残って見えるのは白壁の蔵でした。町の中にあちこちに蔵が立っているので、こんなに蔵が多かったのかと思ったことを覚えています。その蔵が、火を噴いているのが幾つかありました。火を被った蔵が、まだ蔵の中が熱いうちに扉を開けてしまうと火が出るのだと、聞いたことを思い出しました。檜原の小屋で、戦争が終わったと聞いた時は、もう、空襲はない、灯火管制もない、防空頭巾も被らなくて済むと、従弟と二人で掘建小屋の近くの林の中を走り回ったことを覚えています。

78年前の八王子大空襲そのとき、私は

土井 俊玄

昭和20年8月2日、私は小学校4年生の夏休み中のことだった。その当時は自然も豊かで、墓地の周囲は榎の生垣で囲まれ、ところどころに櫟の木が植

えられていた。その樹液を嘗めに甲虫が集まり、それに混じて雀蜂や蝶が群がっていた。当然人を悩ます蚊も多く、どこの家でも香取線香を焚いたり寝るときも蚊帳をつつて汗をかきかき眠ったものでした。その晩夜中の何時頃か憶えていないが、ウーと長く尾を引く警戒警報のサイレンが鳴り響いたので家族みな飛び起きた。しかしまもなく警報は解除されたので安心してまた眠りについた。ところが今度は未明になって、ウーウーという気味悪い断続音の空襲警報のサイレンに驚いて飛び起き窓の外を見るとやや離れた所に落されたと思われる焼夷弾によって焼かれた家の煙が黄色っぽく眼に映り、回り一杯に漂っていた。その時の家族は母と兄弟姉妹 6 人の 7 人であった。父は青年時代の徴兵検査では丙種合格で兵役は免除される筈の所、非常事態なのか前年の昭和 19 年に海軍兵として召集されて家には居なかった。この 7 人は墓地域の中にあつた畑の片隅に掘って作った防空壕の中に避難していた。やがて我が家の近辺にも焼夷弾が数多く落とされるようになって、遂に我が家も、寺の本堂も燃え落ちて灰燼となってしまった。その時の母の働きには感動した。空襲下の中で焼夷弾の落ちる合間を縫って何回も家の中に入り布団をかつぎ出して当面、夜眠るための用意をしたのでした。勿論寺にとって大切な四百年前から書き継がれてきた「過去帳」は真っ先に持ち出していた。「母はつよし」ということはその時から感じていた。家族全員命はとりとめたものの、その後のことは、まさに「生き地獄」で食物が極端に不足し、何日かは家もなく幸い晴天続きだったので夜空を見上げながら露天で眠った。そのようなことを書き続けては紙数がつきないので、皆さんの想像にお任せします。ところでこんな目にあつた私自身の心について書いてみたいと思う。その頃小学校では、「鬼畜米英」という言葉が流行ったり、米英の首脳の似顔絵を貼った四角い箱に向かって布製のボールを投げつけたりした。またアメリカの空爆による死傷者が何十万人と出たり、八王子市も空爆を受けて家は焼かれ、死傷者も多数出たにもかかわらず、アメリカに対するつよい敵対心や憎悪の心が湧いてこなかったことです。私は自分の心を疑うような気持でした。



でも当時を思い浮かべてみると生活のためとは言え、若い女性がアメリカ兵に春を売ったり、甲州街道にジープに乗ったアメリカ兵が車を止めると大勢の子どもがそれに群がり、チョコレートやガムを貰って喜んでいたので思い出します。私は親に叱られるので行かなかったが、空腹を抱える身では羨ましかった。アメリカは日本を占領してからは徹底的な言論統制をしたり、武装解除は勿論のこと、新憲法を押しつけて戦争放棄をさせたり、「ウオー・ギルト・インフォメーション・プログラム (WGIP)」とって戦争については全面的に日本国及び日本人に責任があるという「戦争についての罪の意識を日本人に植えつける宣伝計画」を作製して、日本が二度と立ち上がれないよう徹底的に物心両面とも骨抜きにしようとしたのです。そしてそれが見事に成功して、日本はアメリカの属国のようになったのでした。

1945 年 8 月 1 日八王子大空襲の日

橋本 治義

当時、私は小学校四年生十歳だった。米軍が撒いたビラによって八月一日の夜、八王子に空襲があることを知った。その日は避難する市民が荷物を背負ったり、荷物を積んだりヤカーを曳いたりして街中は避難する人で溢れていた。その日の午後私達姉弟七人のうち六人が母に連れられて親戚筋の郊外の打越に避難した。その晩、夜十二時頃だったろうか突然空襲警報のサイレンが鳴った。驚いた私達は庭に飛び出して見ると八王子市方面は空まで真っ赤にして燃えていた。すでに頭上には米 29 爆撃機の大編隊が飛来して焼夷弾が雨のように落ちて来た。まるで煙火のように炎を吹いていた。落下するときの焼夷弾の音はヒュー・ヒュルと不気味で恐ろしかった。いまでも耳について離れない。庭に逃げ出した人達は広い庭を右往左往逃げ回っていた。そこへ、飼い主が放った牛や馬も逃げてきて、それは異常な光景だった。そんな中、弟に付き添ってくれていた姐やが髪を乱し悲痛な顔つきで、よろよろと歩いて来て、ボクちゃん！久ちゃん、やられちゃったと言った。その時、又焼夷弾のヒューッという音がした。姐やの久ちゃんはワーツと声を出してとうもろこし畑に倒れ込んだ。



その時、見ると久ちゃんの背中に黒い穴が空いていて、まだ浴衣に丸く火の筋が残っていた。それは焼夷弾が左肩から脇の下に抜けた穴だった。今でも目に焼き付いている。明け方、父が駆けつけ久ちゃんを立川の陸軍病院にかつぎ込んで、幸い一命を取り留めることが出来た。

私達は妹を背負った母と一緒に一晩中、山の中を歩き、翌朝十六号線の御殿峠の道路に出た。山を下りて片倉の婦人会の炊き出しのおにぎりで空腹を満たし、漸く人心地に戻った。その後、自宅に戻ると家屋、屋敷、工場は跡形もなく焼け落ちていた。ただ、赤く焼けただれた工場の織機が並んでいた光景が思い出される。見渡す限り焼け野原で市街に建物らしきものは、安田銀行と三菱銀行のビルだけで意外に近くに見えたのが印象に残っている。

八月十五日の玉音放送は、八月の空襲で焼け出された夜から世話になっていた母の実家でラジオの前に集まって来た村の人達と一緒に聞いた。陛下のお言葉は聞き取り難かったが、そのうち回りの大人達が嗚咽しているのに気づいた。どうしたのか聞いたところ、戦争は終わった。日本は負けたのだと言う。私はその時、これから日本はどうなるのかと想ったことを覚えている。

78年前、日本敗戦時の自分

杉山 友一

昭和20年8月1日20時過ぎ、あの日は確か空襲警戒警報が一度出て、その後一旦解除され、皆がほっとしたところで、再度空襲警報が発令され、その時事態は一変したのです。愈々今度は本物ということで、取り敢えず父を残して（当時住まいは甲州街道沿いの追分町三番地）、母子4人で母方の実家のある恩方地区の大久保（現夕焼けの里）に向かいました。ところが避難の途上、浅川の水無橋に差し掛かった頃です。アメリカ空軍爆撃機 B29 編隊が仕掛けた無数の照明弾が町中に降り注ぎ、辺り一帯は真昼のように明るくなったのです。母子は急いで河川敷に降りて身を潜め、母は川の流れの中まで移動して、持参して来た寝具を頭に被って、その上から川の水を掛けるよう指示をしていました。そんな矢先です、今度は間髪を入れずにヒュルヒュルーと音を立てなが



ら無数の焼夷弾が地上に降り注いできたのです。河川敷に身を潜めた母子4人の身边4~5メートルの辺りにも焼夷弾は落ちてきました。いきなりの極限状態で子供心に死ぬかもの恐怖心で震えたことを覚えていますが、その後の時の流れは無我夢中で記憶がありません。

さて、呪わしい夜も、やがて何となく辺りが静まって夜が明けてきました。空を見上げると晴れた朝空が火の粉で真っ赤に染まって見えました。この印象は78年経った今も鮮明に蘇ります。時を経て水無瀬橋の上に出て辺りを見回したところ、何と橋の麓の一角に3軒ほどの家が焼けずに残っていました。幸運なことにそのうちの一軒は母の知り合いだったことから、早速飛び込みました。共々お互いの無事を喜び合い、何はともあれ腹ごしらえということで、大きな塩むすびを食べさせてくれたのです。この時の「むすび」と一杯の「日本茶」の味も又一生忘れられない思い出の一つです。母はひと時のお礼をしっかりと述べて、兎に角自宅の姿を確かめたくて母子で自宅に戻りました。当然のことながら自宅は丸焼けで、保存していた台所のジャガイモの焼け焦げた匂が鼻を突きました。暫くして、幸い逃げ延びた父親とも合流、無事を喜び合い、一家は、母方の実家まで一里の道を徒歩で向かったのです。

終戦の8月15日はこの母の実家の大久保で迎えました。玉音放送は、大広間にラジオが置かれ、大人たちは正座をして聞いていました。例の、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、もつて万世のために太平を開かんと欲す……という有名なくだりは、子供心にも昭和天皇の独特な語り口として印象に残っています。屋敷の前の大きな樺の木が風に揺れ、アブラゼミの鳴き声と、庭先の小屋からはヤギの鳴き声が聞こえ、何事もなかったように夏の日の午後のひと時を刻んでいました。

終戦後、時を経て分かったことですが、飛来した爆撃機 B29 編隊は169機で、落とされた焼夷弾は M17 集中焼夷弾と云うもので、一つの親管には子どもの焼夷弾が各110本入っていて、何と67万発の焼夷弾が八王子の市街地に落とされていたとのこと。小学校4年生の夏の思い出として胸に刻まれた大惨事、あれから早や78年、改めて平和の有難さ、大切さが身に染みている次第です。

8. 幹事報告

齋藤幹事

幹事からの報告としては次の4点です。

(1) 浮き城プロバスクラブから岩崎安裕会長、森田義弘幹事、加藤力也交流担当の3名がお越し頂きました。

(2) 新会員として橋本治義会員が参加されます。年1~2回はご一緒することもありました。どうぞ良い時間をお過ごしください。

(3) 地域奉仕委員会は「小・中学校合唱応援祭り」の参加校募集をしていますが、吹奏楽と異なり合唱の参加校は非常に少なく難しいようです。

(4) 前期からの課題である情報管理、規定の見直し、ホームページの改訂などについても検討を進めて参ります。

9. 各委員会活動報告

(1) 情報委員会

内山副委員長

第333号は6頁だてとなっております、今後もこの形で進めたいと思いますので、是非とも寄稿文の提出にご協力を頂きたい。

7月のホームページへアクセス数は712件ありました。前年同月が588件ですから大幅な増加です。

(2) 地域奉仕委員会

馬場委員長

八王子市が合唱の歌声響く街になればとの夢に向かって一歩を踏み出しましたが、先行き苦戦が予想される状況です。

7月例会報告の通り、小・中学校校長会で「小・中学校合唱応援祭り」(仮称)への参加募集をお願いしましたが、8月例会時点では計4校(2小学校、2中学校)の応募に留まっています。最低8校の参加を期待しており、今後は理事会で承認を頂いた下記のアプローチを実施予定です。

第一には、今年度のNHK合唱コンクール出場校への勧誘(市立ではない2校)。第二には、合唱部のある私立中学校(2校)への参加要請。それでも未達の場合は、理事会と相談しながら追加の対処案を検討する予定です。

(3) 宇宙の学校

下山リーダー

夏季休暇で「宇宙の学校」も休暇の週が過ぎました。子供たちにとってこの休暇中といえども「宇

宙・命」への関心が強まる出来事が多かったことでしょう。でも不運にも見られなかったり、見落としたりした、人もあるでしょう。

「宇宙の学校」では学校が開いていなくても、動・植物の命の営みに多く接していただきたいと願っています。このことを補助するために「宇宙の学校」に参加している方や、希望する方のために、実験工作テーマを実施するための解説パンフレットをさしあげております。この中から選んで実施される子供も多いです。楽しいテーマがありますので活用してください。

観察、工作などの結果を閉校式の日に発表をします。友達の発表を聞くのも面白い試みで、「宇宙の学校」ならではの楽しみです。

例年実施の多いテーマと、あまり採用されないテーマがありますが、自由です。アイスクリーム作りは人気の多い定番です。

これを元に閉校式で子供が発表します。毎年我々が聴いて、感心するのは調べることの努力や工夫したテーマがあることです。われわれにも強く印象付けられるものがあります。例えば、ダイラタンシーの観察など「宇宙の学校」なればこそ。子供の心に火を付ける、という基本方針の再確認をする機会でもあるので、いつも心を入れ替える夏季休暇です。

(4) 交流担当

一瀬担当理事

来年の五所川原での全日本の総会・大会への東京八王子プロバスとしての旅行に関してチームリーダーをお願いしていた飯田さんが体調を崩してちょっと時間がかかりそうですが、様子を見ながら対応を考えていきたいと思っています。

10. 全日本プロバス協議会

一瀬幹事長

先月20日、21日に四日市南プロバスクラブに田中会長とお邪魔してきました。

定期総会と懇親会に加えて、特に式典はありませんでしたが創立20周年記念も兼ねており、それに招かれた格好でした。「20年の歩み」のスライドも上映されクラブの歴史、活動の軌跡がよく理解できました。記念誌の代わりでしょうが、これはこれで印象深いものがありました。一番びっくりしたのは会員全員がパソコンを使いこなしておりアプリで連絡

取れ合う体制になっていることです。そこまでに行くには大変なご苦労があったものと感心した次第です。来月 13 日には大阪プロバスクラブを訪問する予定です。

11. 同好会報告

俳句同好会 田中 信昭

本日は河合宗匠が欠席されていますので、代理で我が俳句同好会を池田ときえさんと一緒に紹介させて戴きます。今は亡き我が大先輩渋谷文雄氏からの強い要望に応える形で河合和郎会員が宗匠として受けて戴き、我が俳句同好会が誕生したのは平成 23 年（2011）の暮のことでした。月 1 回の例会はその後一度も欠けることなく続けられて来ました。コロナ禍の逆境も紙上句会で切り抜け、この間各人は毎月 4 句を提出、皆で鑑賞してきました。それらの一句一句に対して全てご講評を頂いた河合宗匠には心からの感謝です。私達の手作りの自選句集「タやけ」も（平成 26 年 3 月第 1 号発行）第 10 号を数えるまでになりました。今後も楽しみながら継続していくことを願っています。

皆様も一緒に楽しみませんか。

12. プロバス賛歌

起立、斉唱

13. 閉会

塚本副会長

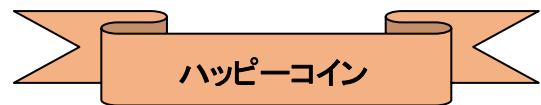
本日は新会員の橋本治義さんをお迎えしました。会員になった喜びを、仲間となってやっていこうという思いを、ご挨拶の言葉から強く感じました。また、埼玉浮き城プロバスクラブから岩崎会長さんをはじめ 3 名のお客様をお迎えし、同じ願いを持つ仲間として、今まで以上に、ますます交流を深めていきましょうという気持を交わす時間が持てたことを喜びたいと思います。

今日のハッピーコインの発表では今までと異なり、書かれた方へ声をかける場面を設け、皆さんで祝福を、喜びを、幸せを、励ましなどを伝える形をとりました。

今日の卓話は昭和 10 年生まれの今年 88 歳を迎える 6 名の方々が、小学校 4 年生ごろに体験をした戦争下の生活、つまり 78 年前の自分を思い出し語る時

間でした。「あの日、あなたはどこで何をしていましたか」をテーマに話され、当時の生活をはじめ、感じたこと、その後の生活、そこから今までの我が生き方を話されました。この話を聞き、自分の生き方を省みるとともに、我が生き方を考えるきっかけになったら、6 人の皆様の今日の話は生きるのではないのでしょうか。自分の体験を思い出し、かつての自分を省みる時間ともなったことと思います。また、同好会で俳句を作る喜びが自分を楽しませる生きがいとなっていると同好会の存在意義を話されていました。

本日は皆さんにとって有意義な時間となっていただけのことと思います。ありがとうございました。これをもって本日の例会を終了いたします。



◆自慢話です。昔の高校野球は甲子園に近い地域が強かったのですが最近は様変わりですね。母校（大阪府立寝屋川高校）は、何と私が在学中に 3 回（春 2・夏 1）甲子園に出場し、アルプス席で声を張り上げました。 馬場 征彦

◆10 歳で八王子空襲を体験、15 日には終戦を迎え。今年で 78 年が過ぎた。体験者がますます減ってゆく。誰かが語り継いでゆかなければと思う。

内山 雅之

◆7 月 4 日、健康寿命の状態で八十八歳の誕生日を迎えることが出来ました。今月（8 月）末には子どもたちや孫たちが湯河原で米寿の祝いをしてくれるのを心待ちにしています。ゆっくりと温泉につかってきます。 岩島 寛

◆ここ二つの台風の生態が変わってきている様に感じます。気候変動の影響なのでしょうか気になります。ハッピーではありませんが。 一瀬 明

◆埼玉浮き城プロバスクラブから 3 名のお客様をお迎えしました。遠路八王子までご足労願ひ誠に有り難うございました。 一瀬 明

◆シニアダンディーズは今年秋、久しぶりに忙しく演奏活動をします。9 月 18 日敬老の日、老人施設「竹の里」に慰問演奏します。10 月 8 日（日）Dr 肥

沼バースデー大会に出演します。横山町野外ステージ 12:00。10月28日(土)八王子芸術フェスティバルに出演します。クリエイトホール 5階大ホール 12:00。暑い日が続きますが練習頑張っています。応援よろしくお祈りします。 立川富美代

◆2年振りの8月例会。猛暑に負けないように頑張ります。 有泉 裕子

◆生後10カ月の孫が伝い歩きを始めました。 山本 通陽

◆本日は新入会の橋本治義様、入会おめでとうございます。早く当クラブに慣れてご活躍されますことを期待致します。ともかく新しい仲間が増えHappyです。 持田 律三

◆本日は友好クラブの浮き城プロバスクラブの会長岩崎様をはじめ3名の方がご来賓でお見えになっております。是非本日は楽しんでお過ごしください。交流の良い機会になればと思います。 持田 律三

◆本日より新たなお仲間、橋本治義氏が入会されました。皆様どうぞ末長く宜しくお祈りします。 杉山 友一

◆本日埼玉浮き城プロバスクラブのお客様をお迎えしました。お久しぶりですが、どうぞごゆるりとお楽しみください。 田中 信昭

◆飯田さんが早くよくなって、この席に戻られるよう希求して。 土井 俊玄

◆国民学校5年生で八王子大空襲を体験、我が家にも焼夷弾命中、あれから78年、久しぶりに八王子祭りのお囃子を聞き、平和に生きられて良かったと感謝。 橋本 鋼二

◆来月3日より久しぶりに1週間北海道へ旅行に行きます。少しは涼しいかも。 野口 浩平

テンダイウヤク

茶室の庭には「テンダイウヤク」「ワビスケ」「カクレミノ」があると言われています。じっくり観察する機会が少なく気付かないことが多いです。

聞き慣れない名前なので調べてみました。中国原産でクスノキ科クロモジ属の常緑低木で、薬用のために栽培されていることが解りました。

茶室の庭は、茶会のときにしか拝見する機会があ

りません。茶事の所作に考えが集中していると、庭木にまで気が回らないのが実情でしょうから、目で確かめるのは難しいことと思います。 (雅)

俳句同好会便り

私の一句〈八月の句会から〉

河合 和郎

今年の夏は連日の猛暑で命の危険もある暑さとか。地球の温暖化はもはや人類の危機とまで言われている。CO₂排出を抑えて俳句が詠めるような穏やかな環境の地球であって欲しいものだ。

蝉時雨途切れで一山風に入る 池田ときえ

蝉時雨が途切れで一瞬の静寂の時がある。そんな一時を「一山風に入る」と表現。とてもいい。

うさぎ小屋前で絵日記夏休み 田中 信昭

宿題は子供たちにとって大変なノルマ。絵日記の材料を探すのも大変。うさぎ小屋は絵になる。

薫風やユーズドカーに人だかり 下山 邦夫

中古車市場の人気車種に人だかりがしている。そんな人ごみの中でも季節の風が心地よい。

新茶の香心静かに一服す 飯田富美子

新茶は香りが命。作者は心ゆくまで新茶の香りを楽しんでいる。そしてこの一句が生まれた。

いつ来ても大歓迎や大夕立 馬場 征彦

今年の夏の暑さは異常だ。そんな暑さを洗い流してくれる大夕立を待ち望んでいる。

浴衣着て小江戸散歩や時の鐘 野口 浩平

乙女たちが浴衣を着て川越の町を散策する様子を一句に。折しも時の鐘が風情を添えてくれる。

芋の葉に転がり遊ぶ雨雫 矢島 一雄

雨粒が芋の葉の上をコロコロと動き回る様子。俳句の材料はどこにでもあるという一句。

八月や「ススメススメ」を墨で消し 河合 和郎

戦後78年目の夏が巡ってきた。敗戦で学校は民主教育となり、軍国主義の句いは墨で消された。

編集後記

今月号は、昭和10年生れの会員6名の方々の卓話を掲載しましたので8ページになりました。 情報・丸山

